

2020 いのちの森植樹祭 in おたる奥沢水源地 Vol 8



◀この植樹祭は緑の募金交付金による事業です▶



A グループ 【9：30~】



B グループ 【11：00~】

2020年9月21日 22日

主催：北海道千年の森プロジェクト

助成：(公社) 国土緑化推進機構

共催：(一社) 小樽青年会議所

後援：北海道後志総合振興局 小樽市 小樽市教育委員会 小樽商工会議所 (一社) 小樽観光協会

小樽ロータリークラブ 小樽南ロータリークラブ 小樽4ライオンズクラブ

北海道教職員組合小樽市支部 北海道中小企業家同友会しりべし・小樽支部 小樽市退職校長会

<http://sennenno-mori.com>

【コロナと植樹祭と地球の温暖化】

新型コロナの感染が世界的流行(パンデミック)を起こし私たちの生活に危機感を感じさせた。小樽においては花園町の昼カラのクラスターに始まり、小樽市立病院の医療機関の集団感染が思いがけなく全国的にコロナの危険地域として名前が広まった。

このことは観光の街小樽としては大打撃である。

令和2年4月以降、コロナの感染で今年予定されていたイベントや行事が中止や縮小されるなか、ウイルスの感染が人の集まる場所ほど拡大することが理由であった。

毎年楽しみにしている市内のお祭りが中止となり笑顔がなくなり社会全体に明るさが消えていった。感染拡大予防に「三密・マスク・手洗い」が日常生活となり、家に留まり、外出を避ける自粛が求められるようになった。

今年はこのコロナ騒動の陰にあって気候変動による異常気象が世界各地に多大な被害を及ぼしている。日本においては静岡県浜松市で史上最高の41.1度の気温が測定され本州各地が猛暑となった。人間の体の体温を超えた気温は熱中症だけでなく、感染予防でマスクつけて仕事をしている人たちにも苦難の日が強いられた。

超大型台風の本州への接近は多大な恐怖心となり、九州各地では豪雨による、がけ崩れなど家屋を破壊し交通手段を分断させ日常の生活に多大な被害を及ぼした。

アメリカにおいてはフロリダ州で史上最高の54.4度の気温を記録し、カルフォルニア州においては山火事が奇妙な雷の多発によって始まり消えることなく燃え続けている。オーストラリアにおいては史上最悪の森林火災が発生している。これらの山火事は世界各地に見られるようになり、異常乾燥の結果、枯れ葉などの摩擦による自然発火の要因も考えられ、発火しやすい環境は想像できない被害額になっている。

一方、ロシア、カナダ、アラスカのツンドラ地帯と呼ばれる永久凍土は地球全体の14%の広さがあるのだが、これが観測史上最高の38度の高温によって溶解していると言う。

この地帯は最低記録マイナス67.8度で1万5千年もの間、溶解することなく続いていたが異常気象によって大きな変化を遂げているのである。永久凍土が溶解すると、動物の死骸などの有機物が分解されてメタンガスや二酸化炭素を大気中に大量に放出して、ますます地球を暖めて温暖化が加速するのである。それだけでなくこの凍土の中に潜んでいる未知のウイルスや細菌が凍土の溶解によって解き放され、新たな感染症を引き起こす可能性がある。

アフリカにおいては異常気象によってサバクトビバッタが異常繁殖し、約4千万匹のバッタが日中の空を真っ暗にして農作物に襲いかかり、一日で3万5千人分の食料を食べつくすと言う。もうすでに中東地域、アフリカ東部、南アジアにおいて2千万人の人が食料危機に陥っている。

正に地球は悲鳴を上げている。このままだとこの悲鳴が人類の悲鳴に変わる日がやってくるように違いない。この要因が地球の温暖化によるものだとすると今こそ世界の指導者はコロナ対策と同じように人類の視点で地球の温暖化に取り組んでいかなければならないと思うのである。

その意味において“北海道”千年の森プロジェクトの植樹活動は世界の先端を行く民間の取り組みであり、14年も続いてきた活動をコロナで頓挫してはならない。

中村理事長は非常な決意で植樹祭の開催を決めたのである。

この中村理事長の開催への意欲を受け止めて、会員一丸となりコロナ対策を十分にした上での14年目・20回目の記念すべき植樹祭が開催されたのであった。

【植樹祭の設営】 9月19日(土)

奥沢水源地に午前10時集合。

一年ぶりの山道を車が登っていく。10時少し前に深緑の植樹会場に着くともう田中理事と荒木副理事長がマウンドで作業の準備をしている。

10時近くになると車が続々やってくる。主に小樽青年会議所(JC)の若きメンバーだ。井形理事、札幌から長塚さんが見える。女性の参加は貴重な存在だ。山川副理事長は高齢なので



助っ人に元手宮小学校の校長をしていた元気な荻山さんに来てもらう。政寿司の武田さんの顔も見える。一年に一回の出逢いの人もいるが毎年の参加でお互いに顔なじみだ。残念なのはいつも準備段階から参加していた、まじえる会のメンバーが来られないこと。マスク姿で草原に円形になって朝の打ち合わせを行う。中村理事長の「今日はよい天気になりました。これも皆さんのお陰です。今日の作業を宜しくお願いします」と簡潔で元気な挨拶だ。荒木副理事長が作業の日程を説明する。作業は2班に分かれる。一班は現地作業でマウンドの近くで植樹祭の準備をする。もう1班はトラックなどで会場設営の用具などを運ぶ仕事だ。作業に入る前には市川専務理事が全員の記念写真を撮る。

水源地の入り口から植樹祭の会場まで1キロほど草道を歩いてくる。その道の両側の雑草を切り払う仕事には自動草刈り機が必要だ。中村理事長はその仕事を勝って出る。草刈り機は理事長の所有するものであり毎年使用される。さっそく雑草刈りに出かけていく。エンジンの始動する音が聞こえてくる。

今年で8回目となるおたる奥沢水源地の植樹祭だけあって、仕事の手順を熟知している人ばかりなので気が付いたらもう作業が始まっている。そこへ蘭越の渡辺理事夫妻が現れる。

第1回目の長橋小学校から植樹祭に参加している超ベテランのご夫婦だ。

田中理事、井形理事はマウンドで縄の長さの測定だ。助っ人の荻山さんも何度も参加しているのでいち早く杭を固定するのに【かけや】で打ち込んでいる。



JCのメンバーが中心になって会場の横にある大きな円筒状の牧草を青いビニールシートに包み込む作業が開始される。牧草が切り崩されるたびに噴煙のように牧草が散る。今年は

その牧草の粉塵をマスクが防御してくれる。しかしマスクは作業には暑苦しい。この緑の自然なのでコロナの感染の危険性はないのだろうが我慢をしてマスクをしての作業となった。

ビニールテントが少しの風に煽られる。周りから大きめの石を見つけてビニールを抑えていく。牧草を詰め込む作業が終わりマウンドの近くに運んで行く。流れ作業のように仕事は順調に進む。この牧草が雨や風から苗木を守り、土砂の流れからも防ぐのだ。これまで稲藁を使っていたが稲藁が手に入りづらくなり石狩市から牧草を購入し、運んできている。

午前中の仕事に縄づくりがある。マウンドの両側からM字型に縄の長さを測定して 1 本の縄の長さになる。今年はコロナの影響で参加人数も減少しているので、マウンドは10班に区画し、植樹していただく予定である。その分縄の数量も少なくて済む。この作業も慣れているのでどんどん進む。1年に1回の縄結びの人もあるが体が覚えていて手がスムーズに動いている。この水源地は両側が緑の山に囲まれて沢になっていて雲の通り道のような。白い雲の流れの後に黒雲も流れてくる。しかも今年は雨の心配もなさそうだ。



会場設営のメンバーが長テーブルや椅子を運んでくる。植樹パネル、会場への誘導の看板、クーラボックス、ガス台と植樹祭に必要な用具が運び込まれる。

正午が近づき、昼食が届く。今日は特製カレーライスだ。たちまち食堂が作られて昼食になる。「緑に囲まれた自然の中での食事は美味しいね」と長塚さんがつぶやく。全く参加したみんなが感じている思いだ。この植樹がなかったら出会うことのない関係の人の集まりだ。こうしてボランティアの志を持ち、未来の子ども達のためにと集い会う仲間ができたのも嬉しいことだ。政寿司の武田さんが「明日はマグロの美味しいのを持ってくる」と言う。その言葉にみんな一斉に笑顔なる。また明日、政寿司提供の美味しい中トロが食べられるのだ。昼食後武田さんのマグロ談議が始まる。めったに聴けないマグロ解体の名人の話に聞きほれる。

午後の作業は苗木の搬入を待つて行く。ポット苗は小樽自然の村から運んでくる。荒木副理事長が「自然の村までドライブだよ」と山川副理事長を誘う。クレーン付きのトラックと6人乗りの新型の車で出かける。自然の村は天狗山に有るので山道を車が上っていく。

天狗山は昔、海底にあった。6百万年前に海底で噴火して生まれた火山だ。今は死火山だが山中から貝の化石が掘り出されることがあるようだ。この天狗山は珍しい火山で、普通火山は山頂に行くと富士山のように狭まっていくのに、この天狗山は山頂が平らになっている。それで自然の村が作られて野外キャンプ地にもなっている。

自然の村の入り口には駐車場がある。4連休にコロナの世界から逃れて自然を求めてくる人で駐車場には車が多い。自然の村でのゲートにはキャンプ用の道具を運びリヤカーが10台並んでいる。ここからは自家用車は進入できない。苗木を運ぶトラックは2台のリヤカーを乗せて林の中を奥へと進む。苗木は林道の奥地にあるようだ。

大きな木々の間にバンガローが見える。野外キャンプに来た人たちの姿が見える。苗木は林道の奥地にあった。青々としたポット苗があれば枯れている苗木もある。これを選別してリヤカーに載せるのだ。苗木を 20 本ほど入れたトレーが二箱積まれる。木立の凸凹した草地を何度もトラックに運んでいく。

JCのメンバーは若いだけに力がある。今までもこうして自然の村からポット苗を運んで来ていたのだ。植樹祭の成功にはこうした多くの人たちの勤労の力があるのだ。

自然の村からの帰りは水源地の会場に近づくにつれて雨がポツポツ降ってくる。小雨に中をトラックの苗木を待っている人たちは、午後から前年度のマウンドの雑草取りをしていたようだ。また、マウンドの側には水槽が置かれ、トレーの中に移植コテが並べられている。植樹が終わった後の移植コテの土を洗い流すのに洗車ブラシも用意されている。最後の最後に水槽の水をマウンドに掛けるための水バケツやスコップも置かれて用意周到だ。

苗木を積んだトラックが到着すると待っていたとばかりにポット苗が降ろされる。もうすでに島牧の杉山理事が育てたミズナラのポット苗が届いている。杉山理事の変わらぬ植樹に対する熱意が伝わってくる。このポット苗の種分けは明日の作業となる。

終わりの会が小雨の中で行われる。荒木副理事長が「今日のご苦労様でした。予定通りの作業が終わりました。また明日宜しくお願いします。明日は政寿司の美味しいマグロが待っています」の挨拶にどっと笑いがおき小雨をはじき返していた。

【植樹祭設営 ②】 9月20日(日)

今日は準備作業の二日目だ。お天気は上々だ。10時前に会場に着く。もうすでに自動草刈り機の音がする。武田さんが昨日の中村理事長が刈り残した雑草をなぎ倒している。今日は除草機が 2 台ある。荻山さんが混合ガソリンを満タンにして武田さんを助けに向かう。

中村理事長がライオンズの会合のため函館に行って欠席だ。全員が揃ったところで朝の打ち合わせだ。今日は旭川から若い大泉さんも参加する。長塚さんに誘われて参加しているメンバーだ。

さっそく苗木の種分けに入る。今年も主木はミズナラである。

このほかに黒松内が北限だと言われている【ブナ】の苗が 50 本自然の村から運ばれ、アズキナシ 2 本とクルミが 50 本島牧から寄贈された。クルミの苗は蘭越から5本とクルミも 5 本持って来てくれていた。本当に有難いことだ。



植樹祭への準備の日程は 3 日予定されていたが、全て本日で終わりそうだ。苗の種分けは井形理事夫人が指揮をとって進められた。ポット苗の葉を見て種別できるのだから素晴らしい。作業は順調に進んでいく。

種分けの作業が進んでいる間に着々と植樹祭当日の準備が進む。今年も国土緑化推進機構の「蘇るみどりの山々の写真展」のテントも準備されている。あっという間にお昼になった。

円形の食卓が用意される。コロナの三密を避けて4人掛けとする。待望の武田さんのマグロの中トロが用意されている。見るからに美味しそうだ。

お寿司屋のカウンターに座ったら一個数千円の中トロだ。これを自然の光の中でご馳走になるのだ。この風景は他には見られない光景だ。ここに東京のまじえる会のメンバーがいたならどんなに喜ぶであろう。小樽の我々でさえ普段家庭で味わうことめったにない美味しさだ。感謝しながら味わってご馳走になる。

昨日の昼食に蘭越の渡辺理事からメロンとコーヒーの差し入れがあったのだが、今日も美味しいコーヒーを持って来てくれていた。本当に有難い。

午後からはマウンドの前に種分けしたポット苗のトレーを運ぶ。今年のマウンドが去年の坂と違って平地だったので運びやすい。人海戦術で次々と種分けされたトレーがマウンドの前に運ばれていった。

今年も小樽市の水道局の大きな水のタンクが軽トラックで運ばれてくる。これをマウンドの前の水槽に水を満たす。タンクの蛇口から流れる水は勢いがなく時間がかかる。水槽を水で満たしてマウンドの前に運んで行く。マウンドにはケージの中に『移植コテ』が人数分用意され、使い終わって泥のついた移植コテを洗う洗車ブラシ、水を撒くのに使うバケツやスコップも準備されて明日にでも植樹祭ができそうな感じだ。

初めて参加する人たちのために植樹会場までの誘導看板も付け終わったようだ、千年の森の【のぼり】も立てられて植樹祭を盛り上げる。作業は二日でほとんど準備ができたので予備にとっていた明日の作業は必要がなく準備万端作業が進んだことを確認して二日目の仕事を終えた。植樹祭当日の晴天を願いつつ終了した。

【前夜祭】 総決起大会 9月21日(月)

今年の植樹祭前夜祭は総決起大会と名付けてコロナに負けないで政寿司本店で行われた。政寿司本店の玄関に入るとマスクの点検と体温が測定される。コロナ感染は少しでも油断できない。会場の座席は少し離されて前の人との間は透明アクリル板が設置されている。今回の出席人数は27名感染予防に密にはならず丁度いい人数だ。

山本事務局長の進行で前夜祭が始まった。

中村理事長の挨拶は「陰と陽」の話から始まった。

挨拶を聞いていつも思うことは、理事長はよく本を読み勉強しているなということだ。今回も「集合思想」について語っていた。ヨーロッパの文明が入ってきて日本と言う国はその利点を取り入れて日本風にしていく。世の中に陰と陽のように正反対の人もいるが相手を先入観でみないで溶け入れて行かなければならない。植樹を通して世界中の人が手をつなぎ地球を守っていきましょう」と言っているように思った。

前夜祭の乾杯は小樽青年会議所の宮前理事長が行った。「小樽青年会議所が毎年、千年の森の植樹祭に全面的に協力し、共催してきていることを受けて、今年もしっかりやっていきたい」と決意を述べていた。毎年思うのことだが、理事長に選出される人物はさすがと思わせる品性がある。この千年の森の活動は青年会議所の協力なしには続けられないように思う。本当にこの若さと行動力が“北海道“千年の森プロジェクトの植樹祭を支えているのだ。

政寿司の料理が運ばれてくる。この美味しい料理をまじえる会のメンバーに味わってあげた



いなと思った。

まじえる会の谷会長始め、メンバーの皆様は関東圏の在住が多く、東京からの移動や小樽の滞在がコロナ拡大にかかわるとお互いの運営に関わると今年の参加を自粛された、何としても来年にはお互い笑顔での再会を切に期待するものである。懇親会が始まると透明のカーテンは気にならないように歓談が弾んでいく。

この前夜祭には多忙な中を北海道 4 区選挙区選出の中村ひろゆき衆議院議員が出席して下さった。当、プロジェクトの特別顧問をお願いしてあらゆる角度からサポート頂いていることは大いに力となっている。さっそくご挨拶をお願いします。中村代議士はアメリカの山林火災の話にふれ、地球温暖化の危機感を話されて、千年の森の活動が14年も続いていることを評価してくださった。本当に心強くありがたいことだ。

参加者のスピーチが始まる。JCメンバーは来年の理事長予定者、阿部さんを初め三役のメンバーが決意を述べる。このメンバーを見ていると若いということは素晴らしいことだと思う。市川専務理事もかつてはJCの理事長だった。この千年の森は市川専務理事の組織力、企画力、推進力がなければ14年も続いてこなかったであろう。

又、同じく理事長経験者の荒木副理事長が行動隊長となり、この二人が車の両輪の働きをして千年の森が続いている。こう考えると小樽 JC、JC 卒業生のその後の活動は世のため人のために大きな力になっていることがよくわかる。

続いて千年の森理事のスピーチが続く。それぞれ謙虚に話されてされているが、いつも植樹祭の準備段階から当日の植樹祭のリーダーまで活躍してくれる大事なメンバーだ。札幌から参加の田中理事、長塚さん、そして旭川から参加の大泉さんに大きな拍手が起きる。この前夜祭にいつもご夫婦で出席してくれるのが井形夫妻だ。人柄が温厚で実働力があり千年の森の植樹祭に欠かせない大事なメンバーだ。それぞれに地球の温暖化防止に強い関心を持ち、高い志を持って、毎年活躍するメンバーだが、ボランティア精神が旺盛で今の時代に輝いている人たちだと思う。千年の森の活動を通して本当にいい人たちに出会ったと人生の喜びを感じてしまう。



最後に山川副理事長が気候変動による異常気象にふれて地球の温暖化の危機感を話し、新総理大臣の菅さんが小泉環境大臣に脱炭素社会を指示したことを高く評価した。そして中村代議士にこの“北海道”千年の森プロジェクトの活動成果を環境庁に知ってもらい、全国的に植樹活動をしている民間の団体のネットワークを作ってもらおうようお願いをし、明日の植樹祭に成功を祈願して終わりの乾杯となった。

植樹祭【リーダー研修】 9月22日(火・祝)

“北海道“千年の森プロジェクト 14年目20回目の記念すべき植樹祭の日を迎えた。7時半集合なので6時には起床する。カーテン越しに青空が見えて絶好の植樹祭日和となる。水源地が近づくと植樹祭ののぼり旗が立っている。初めて参加する人たちはこの「のぼり旗」が会場への目印になる。

朝の奥沢水源地は爽やかな空気が美味しく感じる。植樹のマウンドを一周する。植樹に必要な道具が見事に準備万端整っている。今年は予備日を入れて準備の日を三日取っていたが、新型コロナウイルスの関係もあり参加人数も少なく準備も二日で終わったのだ。

間もなく次々と車が到着する。みんな頼もしいメンバーだ。午前8時に自然に円形になり朝の会が始まる。まず中村理事長の挨拶だ。

「こんないい天気になったのも皆さんのお陰です。今日はよろしくお願いたします」

と短く笑顔での挨拶だ。続いて荒木副理事長より今日の植樹の手順についてお話をする。初めに10班のリーダーを紹介する。各グループに理事メンバーとJCメンバーが2名ずつ担当する。



今年初めてリーダーに選出されたメンバーも数人いるため、荒木副理事長は昨夜の前夜祭でもお話をした、宮脇方式の植樹の特色を原点に戻って4点確認する。

- ① 土地本来の潜在的な自然植生種の苗を使う。
小樽の場合はミズナラが主木となる
- ② ポット苗を使う。
- ③ 高木から低木まで各種類を混植密植にして植える
- ④ 市民の手で植樹をする

北海道千年の森の最初の植樹から宮脇先生の厳しい指導があったので宮脇方式が身についている会員が多い。植樹の手順と注意事項について話をする。まず水槽にポット苗の根を付け十分に水を吸わせる為、苗木の入ったトレーを二人で水槽に入れる。すぐに空気の泡がでる。その泡が消えるまで水に付けてたっぷり水を吸わせる。

マウンドはよく土が攪拌されているので大勢でマウンドに上がると足跡が深く付くので、

まず四人が縦に並んでポット苗を手渡しで運びマウンドに置いて行くことにする。次の注意事項はポット苗を引き抜く時だ。ポット苗を逆さまにすると自然に苗木が抜けてくる。絶対に無理に引っ張ってはいけない。もしポット苗が抜けにくい場合はカッターで割いてもいい。苗は一列に並べては植えない。三角になるように移植コテの長さの二倍か一倍半ほどの長さで植える。穴の深さは苗が埋まるように深く掘り、掘った土は上にあげる。苗木に手を添えて優しく植える。杭に繋いである縄はM字型に張っていく。杭に縛る縄の要領を初心者に



上手に縛れるか実際にやってもらう。みんな合格だ。縄は牧草を敷き、それが飛ばないように張るので力を入れてピンと張る。水槽の水がある内に移植コテを水槽で洗う。後は水槽の水をマウンドに掛けて終了だ。無事時間内にリーダー研修が終わる。



今年は新型コロナ拡大防止の為、開会式や全体が集まったの植樹指導は行わない。14年目にて初めて宮脇昭先生、藤原一繪先生の指導がないのは残念ではあるが9時に始まる。会場にはマスクを付けて市民が集まっている。会場入り口でマスクの点検と体温の測定を行い、北海道の感染者発見システムにQRコードを読み取りしてもらい会場に入ってもらおう。

セレモニーを省略して中村理事長の開会挨拶だけになった。元気いっぱいの理事長の挨拶の聲が会場に響いて植樹祭が始まった。挨拶はコロナの大変な時にも関わらず参加してくれたことへのお礼から始まった。そしてコロナに隠れてはいるが気候変動による異常気象が地球の温暖化の進行を遂げていることに注意していかなければならないと述べ。私達の命は人間だけの繋がりではなく自然とも繋がっていることに気が付くことが大事なことを強調し、そのためにも自然の森を造るために千年の森は14年間20回の植樹を市民の手で4万本植えてきたことを評価して、今年も頑張って植樹をしましょう。と力強く述べていた。

理事長の挨拶の後、第一回目の植樹は1班から5班までで行うことを知らせてリーダーの紹介があった。理事長の提案で本日のセレモニーに一つ加えて、童謡『故郷』をみんなで手話で行うことになった。



ユーモアたっぷりの理事長の指導に合わせて手話の『ふるさと』は大いに盛り上がっていた。

植樹の前に記念写真を撮った。浜田写真館の合図で「千年のモリ～」の笑顔で写真撮影が終わり、各班ごとに植樹が始まった。例年よりも密にしないでマウンドごとに手際よく植樹が進んでいく。もう水源地での植樹は8回目なので参加者に知った顔が見られて、

順調に作業が進んでいった。天気も上々だ。気持ちよく汗を流して作業が進み、移植コテを水槽で洗ったあと、水をマウンドにしみ込ませて植樹が終わり、例年のように立て札に名前を記録する。そして各班ごとに集合写真を撮って終了した。一部の参加者は10時半には終わったので少し早い昼食となった。中村理事長の奥様が手作りで作った特大、いくらとシャケの美味しいおにぎりが待っていた。それに市川専務理事のお店の豚汁も格別に美味しい昼食となった。



子どもさんを連れた親子連れも沢山参加してくれた。秋空の下での植樹祭への参加は家族にとっていい思い出になるであろう。微笑ましい思いで家族での食事風景を楽しむことが出来、家族の大切な思い出となったことであろう。

2グループ目の開会式は10時半から始まった。中村理事長の挨拶の後の故郷の手話での合唱はみんな楽しそうだった。第一回目と同じようにリーダーの紹介の後、6班から10班まで、全てスムーズに流れるように作業が進んでいった。

会場には国土緑化推進機構の共催で写真展が開設されている。『蘇る緑の山々とハゲ山』が日本の緑の重要な歴史である。多くの市民にも見ていただき、関心を呼んだ。



第二部の人たちにもおにぎりや豚汁は大好評だった。お茶やジュースも提供されて、深緑の中現地での植樹祭は成功した。ホームページを見て参加した札幌の夫人がいた。きっと満足して帰ったことであろう。この植樹祭の成功の陰に小樽青年会議所のメンバーの働きがあったのだ。後始末の最後の最後まで統率取れたチームワークが輝いていた。本当にご苦労様でした。これからもコロナに負けないで市民の力で木を植えていきたいのだ。





今年の植樹祭は異例づくめだった。この新型コロナの災禍の中で植樹祭を行った事に大きな意義があったように思う。北海道千年の森の13年の植樹活動は長いようで短く感じられる。それは植樹の仲間ができて毎年やって来られる、まじえる会のメンバーを含めて楽しく活動しているからだ。それに何よりも未来も子どもたちの為に地球の命を守ると言う大きな志を持っているからだ。中村理事長が「ハチドリ」のひとしづく」という話を聞かせてくれた。



森が火事になり、多くの動物が我れ先にと逃げ出したが、ハチドリは口の中に一滴水を含んでは火にかけ、また口に含んで…と何度も行ったり来たりを繰り返した。

というお話だ。私たちの植樹活動も大自然の前にはハチドリの一滴かもしれない。

しかし、このハチドリの行為は崇高な気持ちにさせられる。楽しく活動しているからである。

宮脇昭先生が14年前設立総会の記念講演会にて小樽の植樹運動を小樽から日本へ、そして世界に発信していこうと言った魂の言葉を今でも鮮明に思い出す。

これからも、宮脇昭先生、藤原一繪先生にご指導していただきながら、まじえる会のメンバー始め多くの皆様と、連携してこの植樹運動を世界にひろめていきたいと誓う。

記:山川 隆 20201010

